

追憶の変貌

その美しさを

君は

どこから手に入れた。

しなやかに伸びた

若く

やわらいだ襟足から

君の

雪色の全身が楽に想像できる。

髻髪を 粗雑にかきあげた黒髪の間

僕の心はまぎれこんだまま

見つけだせなくなる。

足が竦む。

妖艶な くびすじ、 からは

あの頃の君を

手繰り寄せられない。

十代を

同じ校舎で過ごした君が 今

かくわしい

ひとりの女性になっていたことに

僕の頭の中では理解できない

をんなの

不思議さを感じている。

あの頃の君は

どこへ行ったのか。

高校を卒業し 仕事についた。

恋をして

覚醒した。

婚約をかわし

純美した。

それから……

パートタイマーで

僕の勤める会社へ来て

当時の思いをうちあけられるまで

まさかこの僕に

憧れを抱いていようななどは

思いもよらないことだった。

ちよつとした

時のいたずらだった。

君や 知った人に見られたくない

と、思うほど

変わってしまった今の僕に

おそらく

君は

人にかかる

時の不均衡さを感じたに違いない。

問い正す君の声に

力なく答えるよりも

目の前に現われた君と

その幸せを

ただたんに

さわやかな気持ちで受けとめたかったのに

それなのに

君の髪の香りは 遠慮なしに

僕の心の中まで入りこんでくる

したたりのように

それは

とめどなく

時代を越えた君までも

かさなりあい

心の

奥隅にできていたかさぶたを
剥がすかのように

しずかに

しずかに 沁みわたってくる。